

活動状況報告（9月）

スポーツコース 5期生 太田 ゆき菜

今月は現在留学しているイリノイ大学アーバナシャンペーン校について紹介します。私はこの大学で、車いすバスケットボールチームと車いす陸上チームの活動と、パラアスリートや障がいを持った学生たちのトレーニングやリハビリが行われているジムで毎日研修しています。この大学は世界で最も古くから“大学での障がい支援プログラム”を有していて、何千人もの障がいのある学生の学位取得を支援してきています。始まりは退役軍人病院で、それが大学のサテライトキャンパスに改築、その後すぐにキャンパスは閉鎖されましたが、障がいを持った学生たちの抗議運動により、現在のメインキャンパスにリハビリプログラムとして移ることに成功。大掛かりな実験のような形で大学に障がい者がいて学ぶことのメリットをスポーツも含め色々な面で実証し続けたという歴史があります。世界初の車いす対応バスシステムの構築、優れたアクセシビリティ、伝統的なアダプティブスポーツプログラム、数多くのパラリンピアン輩出など、この分野においてパイオニアとして古くから精力的に活動している大学です。この歴史的背景は非常に重要で、消費者意識ではなく、相互的な関係性であることが長い間このプログラムが継続的に育って来た理由の一つかなと思います。また、投資の概念、何に時間とお金をかけるのか、何に価値を見出すのか、適切なタイミングで自己投資していけるか、その感覚もとても重要であり学ぶべきポイントだと思います。

実際に車いすの学生はたくさんいます。肢体不自由に加え、知的障害もあり電動車いす、かつ話すのも難しいような学生でもサポートを受けながら学びにきています。遅刻しそうと言って電動車いすを暴走させている学生もいます。また、学生だけでなく、この大学の職員にも障がいを持っている人が多くいます。アダプティブスポーツプログラムに関わるコーチ陣は皆車いすユーザーですし、現在リハビリ室でお世話になっているPTは義足の方です。他にも私の英語の授業を担当してくれている先生は足が不自由で日本だと車いすレベルだと思いますが、両松葉でジャンプする様に移動する強者です。大学自体はパブリックアイビーの一つにも数えられていて教育の質も高いです。車いすでも同じように勉強できる環境、逆にちゃんと勉強しないとやっていけない環境、equal opportunityです。肢体不自由、知的、視覚、聴覚、ものすごく色々な障がいを持っている人たちが当たり前のように学位をとりに来ており、それだけの環境が整っている大学が世界にはあって、もし学びたいければ学べる方法があること、そしてここではアカデミックとスポーツ双方のキャリアを構築していけること。もちろん努力は必要ですが、それも含め“教育”に投資をできるかが、人生において一つのポイントだと私は思います。また、学内にある様々な施設の中でも非常に興味深いのがdisability resources & educational service (DRES)と呼ばれるシステム、施設です。障がいを持った学生のためのリハビリや住居、学業、スポーツ、キャリア、メディアサポートなどが行われています。アメリカの車いす陸上のナショナルトレーニングセンターもこの施設の中にあります。私は毎日ここにいる時間が多いのですが、学びがいのある素晴らしいシステムです。じっくり学び、レポートしていきたいと思います。

今回の留学では、次の世代に伝えるというのも私の中での一つのテーマなので、北海道の障がいを持った子供たちやそのサポートをしたい若者たちにオンラインで少しずつ伝えていくようにしています。また、現地の情報を北海道の小児PT研究会に定期的にシェアする機会をいただいております。北海道の医療とパラスポーツの連携を進めるためにも、まずは医療従事者の皆さんに知ってもらう、興味を持ってもらうということから始めています。コロナ渦で急速に進んだオンラインの良さを生かし、引き続き“伝える”ということも意識していきたいと思います。毎日恵まれた環境で学べることに感謝し、引き続き積極的に活動していきたいと思います。

